

第145号

平成13年10月

E-mail: © 2001
shimz@mb.infoweb.ne.jp
LDG04167@nifty.ne.jp

SCだより

編集発行人

清水吉男

(株)システムクリエイツ

横浜市緑区中山町 869-9

電話 045-933-0379

FAX 045-931-9202



10回め



朝の8時前。店の中の準備を終えて、通りの落ち葉を掃除するために店の外に出た。会社に向かう人たちが、信号の変わり目で固まって流れてくる。

それにしても朝晩がめっきり冷え込むようになった。草葉の表面は露でしっとり濡れている。街路樹のニセアカシアの葉も、半分ぐらいに減ってしまった。日光のいるは坂も紅葉のシーズンを迎えたようだし、店の前の植え込みのホトトギスの花も、先の方だけになってしまった。人は気づかなくても、季節は確実に移っていく。

自分はこうして店の前の落ち葉を掃いたり、花に水をやりたりしているので季節を感じることができるが、仕事で、毎日この道を行き来する人たちは、いったいどれくらい季節を感じているのだろう。“そんな悠長なことを言っておれないよ”なんて言われそうだな。でも、自然の動きを感じなくなったら寂しい。自分には「朝顔の栽培」と言うのがあったから、忙しい時でも、季節を感じながら仕事をしてきたけど。園芸を趣味にしながら、ソフトウェアの開発をやっている人って少ないだろうな。

職種によっては、釣りや登山、ダイビングなど、季節と触れ合う時間がとれそうだけど、ソフトウェア開発の分野では、それすら容易ではないかも。

「マスター、おはよう」

といてドアを開けていつもの客が入ってきた。

「あれ、今日は朝から？」

上機嫌な表情で、いつものカウンターの奥に座った。

「そうなんです。実は昨日、CMMのレベル2の認証がとれたんですよ」

「へ～、それは良かったじゃない。そう云えば、少し前にアセスメントがあるようなことを言っていたよね」

「はい、それでマスターに知らせたくて、いつもより早く家を出てきたんです」

「わあ、それは光栄だな」

「いえ、マスターには、いろいろと教えていただきましたので」

私は、彼の顔を見ながら、

「コーヒーはいつものでいい？」

と聞いた。彼に話しかけている自分の顔が綻んでいるのが分かる。

「はい、お願いします」

といて、カウンターの端から灰皿を引き寄せ、たばこに火をつけた。今の彼は、とにかく「レベル2」のゴールテープを切ったことで、

ほっとした気持ちで満ちている。ま、こういう時があってもいいのかな。すぐに現実を引き戻されるだろうけど、と思いながら、

「あの組織を、3年間よくここまで引っ張ってきたね」

と労いの言葉をかけた。

「3年前が、すぐ昨日のように思えますよ。最初は、この忙しいときに、何をさせる積もりか、という感じだったですからね」

「そうだね。あのような状況では、どうせ何をやってっも同じさ、という気持ちになっているからね」

「あの時、マスターから、“エンジニアの凍った心を解かすのは、リーダーの熱意しかない。現状を打破する方法を見つけるために必死になって苦しみなさい”と言われたんです」

「そうだったかね。言った方は覚えていないものだね」

「あの時は、他人事だと思って簡単に言ってくれるよ、と思ったんですが、後になって考えてみたら、それまでの私は、自分は彼らと違うぞという気持ちで見ていたし、第一、彼らと同じ視線で考えていなかったことに気がついたんです」

「ほう」

と言って、入れたてのコーヒーを、南海の澄んだ海の色を連想させる透感のあるブルーのカップに入れて、カウンター越しに差し出した。今の彼の気持ちが、たぶんこんな色だろうと。

「それから、彼らの話を聞き、彼らが抱える問題を彼らと同じ視線で考え、一緒に議論し、一緒に対応策を考えるようにしてきました。その時も、マスターから取り組みの順序を間違えないように、というヒントを参考に、最初に要求仕様の書き方に取り組んで、みんなで意見を出し合ったんです」

「うまく書けるようになったの？」

「はい、比較するのは難しいですけど、少なくとも、仕様漏れのバグは大幅に減りましたし、設計作業もソースの量と比べて、工数は少なくなっています」

「うん、それは間違いなく要求仕様の書き方が改善されたという証拠だね」

「そう思います。もっとも、まだ仕様関係のバグが全体の10%ほど出ているので、この原因のプロセスを追及して行こうと思っています」

「プロセスもだいぶ定着したかな？」

「はい、教えていただいたプロセスフローダイアグラムは、組織の皆で議論するのに役に立っています。ISOでのワークフローと違って、プロセスと成果物の合理性が確認出来るので、レビューしやすいですし、微調整が楽です」

「それは良かったね。そこまで活用してくれたら、教えた方も教えがいがあるというものだね。エンジニアの皆さんも、変わったのではない？」

「そうですね。明るくなりましたね。それまでは刺々しかったんですけど、気持ちの中に落ち着きが出てきたですね。正直言って彼らがこんなに変わるのかと思いましたね」

と言って、コーヒーを啜りながら、

彼はこの3年間の時間を振り返っている。いい顔だ。実にいい顔だ。“仕事人が人を創る”というが、正確には“仕事の仕方が人を創る”と言わなければならない。

「マスターはいつも、仕事の仕方が悪いと人格を損ねるよ、言っていましたよね。今回、その意味が分かりましたよ。考えてみると危ないところでしたね」

「私も現役の時に、そうして崩れていった人を沢山見ているからね。何人かは、淵から引き上げることができたけど、どうにも出来なかった人もいる。もうちょっと踏ん張ってくれれば良かったり、私の方のやり方にまだ工夫が足りなかったのかと思ったりで、今でも思い出すと辛いね」

「運良く立ち直った私たちは幸運だったけど、まだまだ混乱している人たちは沢山いると思います。そこではやはり、嘗ての私たちがみたいに、ぎすぎすした中で仕事をしているのでしょね。今回、自分たちはそのような状況から抜け出すことができ、初めて、自分にも何か出来ることはあるのではと、思うようになりました」

「嬉しいですね。その役は、実際に混乱の淵から這い出る方法を見つけた人だけが出来るものかもしれないね。でも、まだまだ必要な知識や経験が足りないよ。まずは、現実のあなたの周りにある問題を抽出し、それを定義し、解決する方法を考え、そうして実施してみる。このサイクルを何度も回すことですね。そうしているんなら場面の答えを手に入れることです」

「自分もそう思っています。レベル2を取ったといっても、QCDの面ではまだまだ課題は残っていますし、

組織として安定させることやメンバーの教育の問題など、レベル3の取り組みの中で解決方法を探していきます」

「できそうですか」

「はい、ここまで来たのですから。皆もやる気になってますし」

「いいね。ただ意気込みは買うけど、周りに居る人たちの表情や、音もなく変化する季節の移ろいが見えなくなってくるのはダメですよ。あなたの新しい役割は、そうして現実の問題を解決して

いく中で、“時節到来”の鐘が知らせてくれるでしょう。それまでは、今の役割に専念した方がよいでしょうね」

「分かりました。いろいろありがとうございました。そろそろ行きますね。また、困ったときはここに愚痴をこぼしにきます」

といて、席を立てて店を出ていった。

その後姿は、3年前、今日と同じカウンターの席に座って、チームのメンバーの悪口や上司への不満ばかり言っていた彼とは別人になっていた。

人は、自分の人生の終盤の姿まで考えて、その仕事を選んではいない。だが、たまたま選んだ仕事で、上手くやる方法を手に入れることが出来なければ、人格を損ね、人生をも自分の手からこぼしてしまうことになる。

まずは自分たちの「要求仕様」がうまく書けるようになること。すべてのことは、ここから展開する。

暁鐘の音

128

遅いことは「罪」

連日、リストアのニュースが新聞紙上を賑わしている。久しぶりに一時帰休のニュースも流れ出した。日本経済は、土砂崩れと地割れを前にして、今や立ち往生の状態である。

方や「構造改革なくして景気回復なし」といって、財政を改善すべく、特殊法人の天下となった歯車を外そうとしている。だが一方で、財政を引き締めるのは、危篤状態の患者に繋がったチューブを外すような行為だと言いがいながら、何も決まらず半年、一年と過ぎていく。

バブルが崩壊して、日本経済の仕組みを変えないとダメだと言われて一〇年過ぎたが、「規制緩和」も「構造改革」も、遅々として進まない。「ある日気づいてみたら、取り組みが一〇年も遅れていたのはなぜか？それは、何をやるかを具体的に決めていなかったからであり、どこまで進んだかを誰も追跡しなかったからである」。

内物価が引き下げられ、さらに流通の構造改革が進み、国内の小売り価格が下がった。世間では「デフレ」と呼んでいるが、私に言わせれば、小売りまでの間に余分にぶら下がっていた中間搾取の仕組みが外れた分も少なくないと思っている。

こうした価格競争に破れた企業が淘汰され、その過程で失業者が出始めた。これにタイミングを合わせるかのように、頼みの「IT景気」が縮み、日本の得意の製造業に在庫が積み上がってしまった。さらにアメリカで起きた航空機によるテロや、その後の炭素圏による混乱が、世界の経済活動を大きく後退させてしまった。

この一〇年、減益続きで体力が弱っていた日本の企業にとっては、戦後最大級のダメージである。そんな中で、首相の「多少の痛みは・・・」の言葉に乗じる形で、多くの日本の企業は、こぞってリストラに踏み切ったため、公称での失業率が5%にまで膨れ上がった。もっとも、ヨーロッパ式の計算では一〇%にも達していることは、総務省自身が公表しているぐらいである。

この現実には、さすがの首相も「三〇兆円」の枠に拘りきれず、あっさりとした政の行動を認めざるを得なかった。だが、この方法で問題が解決するわけではない。それどころか、悪くなるだろ

う。その理由は、今日の日本経済の低迷の原因が、外的要因や景気の問題にすり替わっていて、日本の企業の競争力の低下にあると認識していないからである。この認識の上で、競争力を回復させるための施策を実施しないかぎり、産業の空洞化は防げないし、貿易赤字国への転落も避けられない。

半導体にしても、世界の需要がゼロになっただけではない。残った需要を獲得できず、自分たちが供給市場から退出を余儀なくされるのは、競争力の問題以外には見当たらない。日本企業の経営者が、まるで「IT不況」のせいにして、経営の問題ではないという姿勢で大量のリストラを発表しているが、これでは何も解決しない。

企業に競争力がないかぎり、たとえ半年後にアメリカの回復に続いて世界

今月の一言

今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言

「人にとって最も恐ろしいのは、情性で日を送ることである。向上心があれば、飽きることはない。仕事・生活の中に、向上の道を残さねばならない。向上を求めなければならぬ」

(西堀栄三郎・南極越冬隊長)

家はまだ自分たちの議席(就職先)を確保せんがために、選挙のルールを変えようとしている。「サライマン」は、このままではいけないと言いつつ、昨日と同じことを繰り返している。大学生は、大学生活を満喫するなんて言いながら、漫然と「学生」を続けている。医者も教師も役人

性の強い子供たちは、「向上」の意味を見出せず反抗している。仕事を進めるための技量を向上させれば、仕事がかどり楽しくな

には解らない。自分の人生の意味を認識してえたい。

今こそ、我が国の企業が競争力を失った原因はどこにあるのか。それを回復するには、どうすればよいのかを、真剣に考え、早急に対応されなければならぬ。そうでなければ、世界経済の中の日本の椅子はなくなってしまうだろう。

たとえば、二一世紀の社会基盤を築くための実験場を、世界の企業に提供したり、バイオ技術を使った新しい医療や環境改善を模索する「場」を誘致したりして、世界の先頭を行く技術の芽を育てる場を提供することで、学生も

含めて、新しい時代の役割を獲得できるチャンスが得られる。そこで個人が競争力を持っているということは、彼らを擁する企業の競争力も高まるし、そのまま、国の競争力に繋がっていく。すでに、このような動きは、アイランドやマレーシアで行われている。他にも供給者が現れる可能性がある以上、対応が遅いとその役割も手に入らないことになる。

「遅い」ということは罪である。それが国であれば一億人が救われない。これが「罪(不作為罪)」でなくていったい何と呼べばよいのだろうか。一〇年間、適切な対応を遅らせ、このうえ、企業の競争力の回復を遅らせてしまえば、日本は「ただの小国」になってしまう。極東の「ただの小国」に、世界はどのような興味を示さるだろうか。

今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言